

第1回松本市基本構想2030市民会議 会議録

1 開催日時

令和2年7月9日（木）19時00分～21時15分

2 開催場所

松本市役所 大会議室

3 出席委員

山本達也 委員、三輪裕彦 委員、山村和永 委員、上原道家 委員、内山博行 委員、原薫 委員、菊地徹 委員、林靖人 委員、益山代利子 委員、清水是昭 委員、齊藤忠政 委員、渡邊匡太 委員、伊藤博敏 委員、宮下祐介 委員、荒井英治郎 委員、海野暁光 委員、三村仁志 委員、窪田隆彦 委員、赤沼留美子 委員、佐藤佳子 委員、内田佑香 委員

4 欠席委員

なし

5 事務局出席者

臥雲市長、中野政策部長、近藤総合戦略課長、藤井課長補佐、山口主任、小松主任、SCOP（北村、木亦）

6 結果概要

(1) 開会

(2) 市長あいさつ

松本が2030年をどのように迎えるのか。また、2030年に向かって松本がどのような地域になっているのか。この先10年を見通した計画を作っていきます。これは、これまでも松本市が行ってきたことではありますが、従来の行政の延長線上ではないやり方で作り上げていきたいと考え、ここにお集まりの皆さんにご依頼いたしました。

16年ぶりに松本市長が変わりました。そして、思いがけず、新型コロナウイルス感染拡大に直面し、松本はもちろん、日本全体、そして世界全体が、非常に大きな転換期を迎えているという認識を、多くの方が持っていると思います。

くしくも、この10年構想は、松本にとって、非常に大きな節目になることになったという認識を持っております。

是非とも、委員の皆さんに大きな議論をしていただきたいと思います。

松本市が当面抱える問題を挙げるだけでも、来年4月の中核市移行や市役所の建替えがあります。私は、市役所を中央集中型から分散型に転換することを掲げ

ていますが、市役所が建物だけではなく、組織も仕事も市民との関係も、大きく変わる、あるいは、変えなければいけないと考えています。

さらに、松本城外堀を復元し、三の丸全体を世界水準の歴史観光エリアとする整備も進めたいと思います。

松本駅が10年以内に再開発されます。それに合わせた、公共交通や交通インフラのあり方も、この10年の大きな課題であります。

また、コロナウイルスの問題でICT・デジタル化の遅れが浮き彫りになりました。ICT・デジタル化こそ、これからの時代の公共インフラということで、自治体としてどこまでそれに取り組んでいけるかという問題もあります。

さらに、社会の根底にある、人づくり、子育て、教育の問題についても、今までの延長線上でない議論を、展開していただきたい。

そして、これまで続いている高齢化、長寿化という流れをどのように豊かなものにしていくかも大きな課題です。

ぜひ、様々な松本の問題を総合的に捉えて、単なる行政文書を超えた、市民の皆さんが大きな希望を持てる未来構想を、皆さんとともに作り上げていきたいと思っています。

私は、誰も置き去りにしない、一人一人が豊かになれる、或いは豊かさを追求できる松本にしていくことを選挙の時に掲げさせていただきました。

今日は、幅広い方々にお集まりをいただいています。ぜひこの誰も置き去りにしない、一人一人が豊かさを追求できる松本を2030年に向けて作っていくため、皆さんの英知を借りしたいと思います。

そして、もう一つ大切にしたいことが、今回は従来とは違うプロセスを、山本座長を中心に進めていってもらいたいと思います。

三つの部会を設けさせていただきました。この部会ごとの議論・討論も、従来ではないあり方で進めていただきたい。

また、来年3月までに総合計画をとりまとめるに当たっては、様々なチャンネルを活用し、できるだけ幅広い市民の皆さんに、プロセスをお伝えしながら、大勢の方々を巻き込んで、自分たちの未来構想だと考えていただけるような進め方を、ぜひお願いしたい。

この後は、山本座長を始め、委員の皆さんの闊達な意見交換を元に進めていただき、提言としてまとめていただいたものを、私は受けとめるという立場で臨みます。

今日は限られた時間ではありますが、単なる顔合わせに留まらない時間になればと思っておりますので、よろしく申し上げます。

(3) 座長あいさつ

座長を務めさせていただくということで、身の引き締まる思いとともに、相当わくわくもしています。お集りの委員の皆様と、松本のために仕事ができること

はこれ以上ない幸せなことだと感じています。

座長という立場で考えていることを述べさせていただきます。

今市長あいさつにありましたように、期せずしてポストコロナということを考えないといけない。この10年はそういう時代になってしまいました。

私は国際政治も専門としていますが、国際政治学者たちと「単純なグローバル化の時代が終わった」という議論を、過去10年ぐらいずっとやっており、今ちょうど、日本中の国際政治学者と「ポストグローバリゼーション」という本をつくっています。ですから、世界のモード（流れ）が変わってきているということ、実はコロナの前から議論していたことを思い出しています。

そして、今我々はかなり苦しい状況に立っていますが、ここで一つの方向性を示そうとする非常に重要な仕事だと考えています。

今日は、3つのお話をしたいと思います。

一つ目は、私が、ここ10年から15年ぐらい言い続けているのが、21世紀の都市のあり方を考えるときは、自然との距離感と都市のサイズがすべてだということです。

二つ目には、足し算ではなくて、掛け算の発想で進めたいということです。

三つ目は、公共政策とは誰のものかということのを常に意識して進めたいと思っています。

一つ目については、都市のサイズという話をすると、東京の大都市に比べて、松本のサイズの小ささ、コンパクトさが良いという議論になります。私もその通りだと思っていますし、まさにこの自然との距離とコンパクトさは良いのですが、逆に一つ指摘したいのは、実は松本は大きくもあるということです。

この市民会議についても、これだけの専門家のメンバーを自前で集められる都市は、日本の中でそんなにはないと思います。

それぞれの立場で専門性を持って活躍されている方を、外から引っ張ってくるのではなく、地域から選出できるという大きさというものを、松本は兼ね備えています。

私は、漢字表記の「松本」、つまり日本の中の松本ということと同時に、今世界がポストコロナに向かって様々活動や社会の変革が起きている中で、ローマ字表記の”Matsumoto”も意識したいと思っています。

世界の中できらりと光る都市として、松本は、十分にポテンシャルがあると感じています。

二つ目は、足し算ではなくて、掛け算ということです。これだけの専門家が集まっているので、皆さんがそれぞれの専門領域を語れば、その内容を文字化して、ホッチキスで留めれば、計画が出来てしまいます。こういうやり方は、どこの自治体でもやっているのではないかという問題意識を持っています。

松本は、かけがえのない、代替できないまちであると思っています。10年間の構想を、どのようにして、この市民会議の中で出すことができるかということは、

委員の皆さんに課せられた大きな宿題で、チャレンジだと思います。

足し算ではなくて掛け算であると言ったのは、イノベーションというものは、あるものと全然関係ないと思われる別のあるものが掛け合わさった時に、起きることが非常に多いです。これは、化学反応や創発（エマージェンス）とも言われますが、掛け算をすると、こういうことが起きるのではないかと思います。

やや強引に、三がく都に例えると、音楽の楽で、オーケストラの演奏をイメージしていて、例えば、バイオリンとか、チェロ、打楽器、フルート、トランペットのそれぞれの専門家があり、ソリストとしても素晴らしい。

この市民会議の委員が、自分の専門についてプレゼンテーションをしてもらったら、みんなが引き込まれるようなプレゼンテーション聞くことができるのですが、それを上手に化学的に融合させながら、みんなで一つの作品を作るようなことが出来ないか。もしかしたら、少し理想的な話なのかもしれませんが、私はそういう問題意識を持っています。

できるかどうかわかりませんが、私は指揮者となって、これだけの個性なメンバーの意見を、一つの作品にするというのが私のミッションだと捉えています。

三つ目は、公共政策が誰のものかということです。私は市民のためだと考えています。先ほど市長が、誰も置き去りにしないとおっしゃいました。ある社会がどういう社会なのか理解したければ、その社会の中で最も弱い立場の人から、その社会見れば良いと言われます。

そういう意味で、やはりこの「市民のため」という考えが非常に重要だと思います。

ただし、この時の市民というのは、今いる 24 万人の市民だけでなく、10 年後の話をしようというわけですから、10 年後にこの松本に生まれてくる、まだ生まれていない未来の市民もいます。

その未来の市民も含めた意味で、やはり「市民のため」であるべきで、今僕らが考えていることや僕らの利害関係だけで考えるのではなく、その次の世代、まだ生まれていないその次の世代まで視野に入れながら議論したいと思っています。

提言や発言が誰のためにやっているのか、そういうことを意識しながら進めていきたいと思っています。

恐らく様々な意見が出て、場合によっては利害対立あるような問題も出てくると思います。ですが、それをまとめるに当たっては、いったい誰のためにまとめているのかということ意識したいと思っています。

皆様に助けをいただきながら、良い形でまとめていきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

(4) 委員紹介

(5) 議事

ア 松本市総合計画について
(事務局) 資料1を説明

イ 市民会議の進め方等について
(事務局) 資料2を説明

ウ 基礎調査の結果等について
(事務局) 事前配布資料を説明

エ 意見交換

(ア) 山本座長からの資料説明

(p 1) 前提となる「指数関数的な無限成長モデル」と「定常型循環モデル」について。

右肩上がりの社会というは、特に先進国では難しい状況になっている。ベストセラーになったトマ・ピケティ『21世紀の資本』では、資本収益率と経済成長率の議論をしています。ピケティの主張は明快で、労働者が生み出す富よりも、資本家の方が多くの富を得ていきます。例えば、松本で稼げば稼ぐほど、資本を持っている東京や外国にお金が行っていることを、証明したという画期的な本です。

それとは別に、お金を増やして、回すことで価値が出るという定常型循環モデルがあります。

(p 2) アインシュタイン、「ある問題を引き起こしたのと同じマインドセットでは、その問題を解決することはできない。」と言っています。指数関数的な経済成長モデルを前提にしながら、いろんな社会モデルを組んできて、これまで良いことも沢山あったと思います。しかし、問題が起きていることも明らかになってきています。その問題を解こうとしたときに、その発想と同じ発想では解けない、ということがアインシュタインの言っていることだと思います。

(p 3) サイズも重要です。20世紀は、どちらかという大きいこと、強いこと、早いことに価値があったかもしれませんが、1960年代に”Small is beautiful”と言った経済学者がいましたが、それから半世紀経て、再度現実味を帯びてきているのではないかと思います。

(p 4) 「自然との距離感」も「資産」であると感じます。私は東京で生まれ、東京で育っていますので、今でも東京に行くのが懐かしい気持ちになります。東京の良さを認識しているつもりなのですが、でも、絶対手に入れられないものが松本に沢山あり、例えば、北アルプスのようなものは、どれだけお金積んでも作れません。松本城もそうかもしれません。

このような資産を我々がどう生かすかという議論もあります。

(p 5) 都市とサイズの価値は、4つに分類されます。

よく多文化共生やインクルーシブというワードで語られる寛容性が高い社会と寛容性が低い社会というのがあります。

どういうまちに才能のある人たちが移住したくなるかという研究結果があり、いくつかある指標のうち、1つ重要な指標が「寛容性」だと言われています。

東京のような大都市、つまり自然との距離が遠い都市（図④）は、寛容性が高いです。しかし、自然との距離は遠い。

おそらく松本は、寛容性も高く自然との距離も近いというまちの価値があるのではないかと考えています。

大きければ良いというわけではなく、大きくて寛容性が低い都市もあり、小さくて寛容性が高い都市もあるということです。

(p 6) 次に、「都市」を構成する3のエリアで、旧市街、新市街、バイオリージョンというエリアがあります。松本市の場合、合併地区はバイオリジョンに入りますが、さらに、塩尻市など、生態的につながりを持つ地域というものが、ゆるやかに広がっています。

松本市の計画なので、松本市だけというのではなく、生態系の繋がりを頭の中においていただきたい。

また、やはり松本市の特徴的な点は旧市街という所で、日本の多くの都市は旧市街を持ちません。それは、戦争で空襲を受けているからです。

戦争のあとに、都市計画を作ると起きることは、パリのシャンゼリゼ通りが典型的ですが、車用の道路を広く通すようになります。

そのような状況で、松本の城下町の区割りというのは、車が不便というのは当たり前なのです。この旧市街地と新市街の関係をどうするのかということは、研究蓄積も沢山あり、面白いです。

例えば交通の問題を考えると、旧市街内の交通を考えると、バイオリジョンから旧市街や新市街に来る交通を考えるのでは、考え方が違ってきます。

(p 7) 政策立案における3つのレベルについてです。

政策の話をする時、「What」の話をしてしまいがちです。本当は「なぜ(Why)」から考えた方がよい。「なぜ」について合意ができていれば、この10年間で技術がどんどん進化して、社会が変化したとしても、「なぜ」は動かないので、どうやるのか、誰がやるかを考えていけば良いと思います。

この会議は単年度計画を検討するものではありません。この先10年、さらにその先を見据えて、「Why」に関する議論をした上で、皆さんの専門で持っている「What」の知識を提供ください。

戦略と戦術という話もあります。戦術ばかり知識があっても、戦略がないと上手く行かないことがあります。例えば、太平洋戦争中の

アメリカがすごかったのは、日本に勝つための戦略だけではなく、勝利後どうするのかというグランドストラテジーを持っていたことです。これは、国家 100 年の計と言われますが、何かを達成するための、さらにその上にある高次の戦略というものがあっても良いのではないかと。

人を育てるということを考えた場合は、大きな時間軸が考えられます。

どんな時間軸で考えれば良いかについて、100 年計画があっても 10 年計画があっても、3 年計画のようにあり、今回考えるのは 10 年計画ですが、その上にはグランドストラテジーがあるべきだし、その下には具体的な戦術があると思います。戦術的に取り入れられない戦略立てても、実行ものでなければ、意味のないものとなってしまいます。

(p 8) もう一つは、「デザイン思考」的なアプローチです。

これは、元々スタンフォード大学で盛んに行っている、人を中心に置いて、デザインし直すというアプローチです。

例えば、各専門分野から意見を述べるのではなく、市民を中心に置いて、その市民は、教育も受けるし、同時に森林に関わり、エネルギーも使うし、交通も利用するというアプローチで考えるのは、面白いと思います。

(p 9) 秩序形成には 2 つのモデルがあります。

ガバメントモデルは、軍隊の組織のように、指示命令系統もはっきりしていています。これが駄目だというわけではなく、このモデルが良い場面もあります。

もう一つに、ガバナンスモデルという概念があります。

ガバメントモデルが駄目で、ガバナンスモデルにするということではなく、両方を合わせ持つことができるはずです。

一体どのような形で、この松本市の秩序維持、秩序形成ということを考えるのかということも大きな宿題だと思っています。

(p 10) 3 つの異なるネットワークについてです。これは 1964 年の論文ですが、当時は、まだインターネットはありません。この論文は、インターネットの設計思想を論じた論文で、この設計思想に基づいて、インターネットが作られてきました。

中央集権型、非中央集権型、分散型の 3 つのネットワークがあり、インターネットは、分散型のネットワークシステムを進めていきました。

中央集権型は、一番の知性は真ん中にあります。しかし、インターネットはネットワーク自体に知識を持たず、知性は、それぞれの手元にあるコンピューターが担っているという発想の違いがあります。

先ほどの市役所の話も出ましたが、知性というものを、現代の技術がある中で、一体どこに、どのように配置すべきなのかということは、思考の実験として非常に面白い問いかけだと思います。

(p 11) 分散型は、設計思想として自律・分散・協調と言われます。分散型は、

自律・分散・協調がないと機能しません。自律というのは、自分が自分を律することができるということです。例えば、松本というまちが、松本だけで立てているという状況。それが分散をしていて、そしてお互いに他のまちと協調しているという話です。

なぜインターネットがこのような設計をしたかということ、冷戦の時代において、核攻撃を受けて、通信が壊れてしまうと困るので、攻撃を受けても壊れない通信は何かということから研究が始まったのです。

そして今、コロナウイルスの流行は誰が予想できたでしょうか。パンデミックがそのうち起きると言われて、本当にそういう状況が起こって一気に変わるみたいなことが、もしかしたら起きるかもしれない。

外からの大きな衝撃に対して、壊れてしまう都市なのか、それでも再び生命力を発揮できる都市なのかという議論の中で、レジリエント（しなやかさ）という概念が使われます。食料、エネルギー、経済や社会インフラが、どういったレジリエントを手にするができるのか、考えなきゃいけない時代だと思います。

(p 12) 最後に、この 10 年で何をすべきなのか考えたとき、政府にいくらでも予算があって、政策的に様々なものを解決できるのであれば、公的な領域を充実させれば良いと思います。しかし、財源の問題もあり、一つの自治体だけでは解決できない大きな問題もあり、公的な領域がすべてのものを解決できない時代になってしまっています。

そのような状況では、公的な領域と私的な領域の真ん中にある共的な領域（コモンズ）があって、これを上手く松本の中で創出して、コモンズのあり方を再デザインするという都市のあり方がないのか考えています。町会も東京と比較すると非常に組織率が高く、様々な活動が行われています。人間関係の近さということはいろいろあり、優位な点とあると思っています。

(イ) 意見交換（自己紹介）

(6) その他

ア 次回会議日程の調整について

以上